



コスタリカ共和国 草の根技術協力

「生活改善アプローチによる農村開発モデル事業活動報告」

No.33

2019.5.31

～**巣立ち**～

NPO 法人イフパット 研究員 宮崎 雅之
(現地調整員/生活改善ファシリテーター)

¡Hola, cómo están todos? こんにちは、早速ですが、現地活動をご紹介します。

松川町高校生受入れ: 松川町の東京オリンピック 2020 ホストタウン事業の一環で、若い世代が成長する機会として、町の高校生をコスタリカへ派遣するスタディツアーが実施されました。その中で、JICA 草の根技術協力事業の活動地であるオロティナ市にも高校生 10 名が 2 泊 3 日の日程で訪れました。目的は、(1) 松川町町民やオロティナ市民のプロジェクト活動との関わりを知るとともに、日本の国際協力の現状を現場で学び、自身の知見を広げる。(2) 学校交流やホームステイを通じてコスタリカの方々との交流を通じ、同国の日常生活を体感することで、新たな気付きや日本との違いの発見につなげる、となっています。

実質丸一日しかないハードスケジュールの中、オロティナ副市長表敬訪問、生活改善アプローチ活動地域視察、技術専門高等学校（普通科、技術科（観光、環境、農業、等））学生との意見交換会を通じ、さまざまな学びや新たな発見がありました。松川町の高校生にはもちろん良い経験になったと思いますが、生活改善グループ員にも良い刺激になりました。日本の高校生に生活改善活動を紹介している姿は誇らしげでしたし、また、活動紹介そのものが、新たな改善活動に取り組む動機付けとなっていました。オロティナの高校生に関し、同年代の人に発表する機会があまりないのか、とても恥ずかしそうに発表していましたが、同年代同士でしか感じられないことを感じられた良い機会になったと思います。そして学生

はもちろんのこと、校長先生や担当の先生が受け入れを一番喜び、高校生を差し置いて全面に出ていることが印象的でした。

少し話は変わります。基本的にお皿に盛りつける量、食べる量の多いコスタリカでは、高校訪問時にサービス業科の学生が用意してくれた昼食の量もやはり大量でした。しかし、松川町の高校生が、お腹いっぱいになりながらも、誰一人残さず、すべて食べ切ったのがとても素晴らしいと感じました。



写真 1. オロティナ副市長表敬訪問



写真 2. 技術専門高等学校生徒との記念撮影

グループ内課題解決研修②：以前、法務省の職員による「グループ内問題の解決」の講義が実施されたのですが、そのフォローアップとして市役所職員ルイスによる②の演習が行われました。今回の演習では、10のテーマ（積極性、管理、責任（個人）、責任（チーム）、信頼、自制、モチベーション、コミュニケーション能力、正直、誠実）が取り上げられ、グループ活動における、それらのテーマに対しての振り返りが行われました。流れとしては、参加者一人一人がテーマとその説明が書かれた模造紙を持ち、皆の前で口頭にて説明したあと、各自が10点満点中、何点かという自己評価、またそのテーマに対する4つの問に回答しました。その後、自己評価を踏まえた上で、所属する生活改善グループがどのように活動するかを発表を行いました。

全体的には良い振り返りの機会になったのですが、演習終了後のルイスとの評価会で挙がったように、内容が少し難しかったのと盛りだくさんだったためグループ員が内容を理解しきる前に自己評価の点数をつけることになってしまいました。その影響か、点数と各自のコメントに相違が見られました。数値化することで自己評価の視覚化、またそれに沿った質問（例えば：そのテーマにおいて、10点となる良い例となる知り合いを挙げるとすると誰か？またその人のどの部分を一番尊敬するか？）は良かったのですが、インプット量が多すぎたというのが反省点となりました。テーマを5つに絞る、アイスブレイクを途中で挟む等の改善が必要との話し合いになりました。

マンゴージャム作成研修：農牧省・食品衛生関連職員カーレンによる「マンゴージャム作り」の研修が実施されました。プロジェクト開始前の想定では、生活改善グループのグループ活動は現地に豊富にある果物を活用したジュースやお菓子等の加工に落ち着くと思われていました。しかし、蓋を開けてみると、高齢者向けレクリエーション、集落内清掃活動、看板作りといったような私たちの考えもしないようなグループ活動が実現されました。そして、その活動を通じてグループ員同士に信頼が築かれ、連帯感が生まれたと感じています。

話は脱線しましたが、研修には約 10 名の参加があり、製造する上での注意点、保存する瓶やジャム自体の殺菌工程（加熱方法、温度、時間）、販売するために必要な関係機関の許可やラベルに記載する表示内容等、果物の選定から納品までの流れを座学、実技を通じて学びました。住民の中からは販売に漕ぎ着けるはわからないが、教わったことを家庭で実践してみるとのコメントがありました。集落や自分の庭に落ちているマンゴーが有効活用され、それが改善活動を実施するための収入源になることを願っています。



写真 3. 10 つのテーマについて話し合い

写真 4. 完成したマンゴージャム

ペニンスラへの研修旅行：生活改善グループ員間での経験共有・意見交換を目的に、10 名のグループ員と 2 名のファシリテーターと共に、ペニンスラのサンタフェ、リオフリオ、サンラモンデアリオ、リオグランデ、4 つの生活改善グループを訪問しました。今回の研修旅行はこれまでとは違い、全員が参加という形ではなく、各グループ代表者 3 名が参加する形を取り、各自が簡単なアンケート（学びたいこと、現状の個別活動とグループ活動について）に回答し、訪問後に何に取り組むかということを書いてもらいました。というのも、どうしてもイベント事となってしまう、良かったね、楽しかったねという感想で終わってしまう傾向があったからです。少し硬いかなと思いましたが、アンケートのおかげで、各自積極的に質問や意見を述べていました。家庭菜園をより良くしたいと考えて参加したグループ員は、葉物野菜は土に直栽培出来ない、日除け網は緑色ではないと効果がないと言っていたが、サンラモンデアリオのグループ員が黒の日除け網を利用し、直植えてレタスやハウレン草を栽培しているのを見て、いままでの固定概念が覆され、自分の家でもやってみようと思っていました。また、農牧省主催の生活改善全国大会に

参加し、その際にサンタフェのグループ員さんが行っていた養蜂の話聞き、視察する機会をずっと待ちわびていたグループ員は、養蜂に使う箱のサイズ、どこで購入できるか、どのように女王蜂を呼び込むか等の具体的な質問をして、必死にメモをとっていました。聞こうと思えばオロティナでも農牧省の技術者から養蜂の話聞くことが出来るにも関わらず、実践している住民から聞いてやりたかったのか、すっかりやる気スイッチが入っていました。生活改善全国大会での経験共有をきっかけに、グループ員の改善活動が他地区のグループ員の改善活動に繋がる瞬間でした。このようなグットプラクティスの共有が連鎖すると、さまざま改善活動が一気に広がる気がします。

また、研修旅行実施時は人前で発表するかしないかはグループ員に任せることが多かったのですが、今回は個人改善活動の成果を発表する場を作りました。その結果、これまでは、「生活改善で家庭菜園技術を、有機肥料の作り方を教えてくれた、色々な場所連れて行ってくれた」といった受動的な内容のコメントをしていたグループ員が、「生活改善は自分自身で考え行動する。まずは、やれることをやってみる。グループ内で正直に思ったことを発言する。」というコメントに変わっていました。プロジェクト開始当時から所属しているこの女性はもう少しで65歳ということもあり、正直なところ受け身な性格が簡単に変わるとは思っていませんでした。しかし、アウトプットをする機会が増え、プロジェクト終了間際で自分の実現してきたことを自分の言葉で相手に伝えられるようになりました。これは大きな成長だと感じました。人前で話すのが苦手な女性に、言葉で伝えることが大事だと思うばかりに発表を後押し過ぎて、泣かせてしまった苦い経験もありますが、改めてアウトプットをする場の重要性、1分でも良いので発表の数をこなす必要性を再認識しました。



写真 5. 養蜂場の視察



写真 6. 個人活動の発表



写真7. 家庭菜園の視察



写真8. フェリー内での振り返り



写真9. 集合写真